

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520426

研究課題名(和文)スンディック諸語の態のシステムに関する比較研究

研究課題名(英文)Comparative study on voice in Sundic languages

研究代表者

塩原 朝子 (SHIOHARA, Asako)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：30313274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではいわゆる「スンディック諸語」ムについて比較研究を行った。ジャワ語、スンダ語、マレー語、バリ語などにおいては、インドネシアタイプの態のシステム、つまり、鼻音接頭辞(me)N-がActor voiceを、動詞の無標の形+人称マーカという形がUndergoer voiceを標示する。一方、ササク語の一部の方言とスンバワ語においては、インドネシアタイプの態のシステムは見られず、鼻音接頭辞(me)N-はactivityを表す自動詞として用いられる。後者の状況に対して、本来の態のシステムの退化として考える仮説と、鼻音接頭辞の本来の機能activityの残存として考える仮説の二つを提示した。

研究成果の概要(英文)：This research project with the voice system of so-called Sundic languages. Majority of languages namely Javanese, Sundanese, Balinese, and Malay, exhibit so-called Indonesian type voice system, in which the nasal prefix (the reflex of the prefix meN- of Malay) indicates the actor voice and the unmarked verb with a person marker indicates the undergoer voice. In contrast to those languages, Sumbawa language and some dialects of Sasak language do not exhibit the system, but the nasal prefix derives an intransitive verb with a meaning of activity, instead. Two hypothesis can be set up for this fact; (i) Sumbawa and some of the Sasak dialects once have an Indonesian-type voice system, but it collapsed in some point of the history. (ii) The nasal prefix originally indicates the semantic of activity, and it is retained in Sumbawa and some Sasak dialects.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：歴史言語学

キーワード：歴史言語学 統語論 形態論 態 インドネシア諸語 オーストロネシア語族

1. 研究開始当初の背景

本研究はインドネシアのオーストロネシア語のうち、いわゆる「スンディック」グループ、すなわち、インドネシアの大スンダ列島、小スンダ列島で話されている言語の態のシステムに関する比較研究である。

このグループの言語の態のシステムは「インドネシアタイプ」(2つの態 Actor Voice/Undergoer Voice とアプリカティブ構文を持つタイプ)として類型化されており、そのシステムは、歴史的によりオーストロネシア祖語に近い「フィリピンタイプ」(3つ以上の態を持つタイプ)からの移行によって生じたシステムであると考えられているが、その変化の過程について現時点ではあまり研究が進んでいない。

2. 研究の目的

本研究ではスンディックグループの各言語にみられる態に關与する接辞の機能を比較し、祖語の再建を行うことにより、その変化の過程の解明を試みる。

3. 研究の方法

マレー語(インドネシア語)、スンダ語、ジャワ語、バリ語、ササク語、スンバワ語などに関して、態のシステムに關する接辞の機能のデータを現地調査および文献調査によって収集し、比較を行う。特に以下の形式に注目する。

(1) インドネシアタイプの態のうち、Actor voice に現れる鼻音接頭辞(マレー語の meN- に対応する形)と undergoer voice に現れる動詞の無標の形の人称マーカーがついた形。

(2) アプリカティブの機能を持つ二つの接辞(マレー語の接尾辞-i と-kan の対応形)

4. 研究成果

(1) actor voice と undergoer voice の対立: ジャワ語、スンダ語、マレー語、バリ語など、大多数の言語においては、インドネシアタイプの態のシステム、つまり、鼻音接頭辞(me)N-が Actor voice を、動詞の無標の形+人稱マーカーという形が Undergoer voice を標示する。は Actor voice の例、は Undergoer voice の例である。

*Dia menjemput saya.*  
3SG AV-meet 1SG  
'He met me.'

*Dia saya=jemput.*  
3 1SG=meet  
'We met him.'

Actor voice においては、動作主を表す要素が主語として現れ、動作の対象を表す要素は動詞の直後に無標の名詞句の形で現れる。Undergoer voice においては動作の対象を表す要素が主語として現れ、動作主を表す要素は動詞の直前に人稱マーカーとして現れる。

一方、ササク語の一部の方言とスンバワ語においては、インドネシアタイプの態のシステムは見られない。まず、スンバワ語における他動詞の無標の形が現れる構文を示す。(これは形式的には上掲のインドネシア語の例文(2) undergoer voice に対応する。

*ka=ku=inóm kawa nan*  
PST=1SG=drink coffee hat  
*ling aku.*  
By 1SG  
'I drank the coffee.'

*ya=inóm kawa nan*  
3=drink coffee that  
*ling nya=Amén.*  
by TITLE=Amin  
'Amin drinks the coffee.'

インドネシアタイプで Actor voice を構成する鼻音接頭辞(me)N-の反映形は、スンバワ語やササク語においても確認されるが、スンバワ語ではその形式は動作の対象を表す要素と共起することはない。にスンバワ語の例を示す。

*ka=ku=nginóm aku.*  
PST=1SG=drink 1SG  
'I drink (something).'

にみられるように、鼻音接頭辞の付いた動詞形の構文では、動作主を表す語が無標の名詞句で現れるという点が の他動詞構文とは異なる。これは、スンバワ語の自動詞構文と共通する特徴である。にスンバワ語の無標の自動詞構文の例を示す。

*ka=ku=tunóng aku.*  
PST=1SG=sleep 1SG  
'I will sleep.'

このことから、スンバワ語においては、鼻音接頭辞の付いた動詞形の構文は自動詞構文であるといえる。よって、に示した無標の動詞の現れる構文が、スンバワ語に存在する唯一の他動詞構文であると言える。(同様のことがササク語の一部の方言にも言える。)

スンバワ語の鼻音接頭辞の付いた動詞は、通常、現在進行中の動作や習慣、人やものの属性など imperfective な内容を表すのに用いられる。例えば、では他動詞 popo「洗濯をする」に鼻音接頭辞の付いた動詞 mopo が用いられているが、この動詞が最もよく見られるのは以下のような現在進行を表す文においてである。

*ta ku=mopo aku.*  
This 1SG=laundry 1 SG  
'I am now washing the clothes.'

また、以下のような名詞を修飾する形でもよく用いられる。

*tau=nyòrò*  
person=N-steal (sòrò) 「泥棒」

*tau=ngapan*  
person=N-chase(apan) 「追っ手」

インドネシアタイプの態のシステムは、単文においては、文の情報構造(主題・名詞の定・不定など)を表し分ける機能を持っているが、その種の態のシステムを持たないスンバワ語では、主題名詞句を述語の前に置く方法(主題化)や不定の動作の対象を表す名詞を述部に抱合するという方法を発展させることによって、態のシステムの不在を補っている。

インドネシアタイプの態のシステムがみられない言語の歴史に関して、Shiohara (2013)では、鼻音接頭辞の本来の機能 activity の残存として考える仮説を提示した。これは、同様の事象を本来あったシステムの退化として説明している先行研究 Wouk (2002: 307) and Ross (2002b:470-471)の仮説に対抗するものである。Shiohara (2013)の仮説の根拠は、次の二点である。

[1]現在のマレー語やバリ語において、鼻音接頭辞は actor voice の接辞としての機能だけでなく、activity を表す自動詞を形成する機能を持っている。

インドネシア語の例

*meng-alir* 「流れる」, *mengambang* 「浮く」

バリ語の例:

*nambung* 「飛ぶ」, *ngelanggi* 「泳ぐ」,

*ngorta* 「おしゃべりする」, *ngeling* 「泣く」(Artawa (1998: 58-60))

[2]スンバワ語においては、鼻音接頭辞のついた動詞形が activity と意味的共通点を持つ imperfective アスペクト(進行形や習慣)を表すことが多い。

この仮説が正しいとすれば、インドネシアタイプの態のシステムはスンディック諸語の祖語にさかのぼることはできず、後になって多数の言語に共通に起きた統語的变化であると考えられることができる。

一方、前述の「退化」説が正しいとすれば、スンバワ語やササク語の一部の方言は、現在のマレー語の一部の方言にみられるような、統語的に簡略化された形と歴史的に関連づけることができるということになる。このことは、で述べるように、スンバワ語とササク語の一部の方言において、アプリカティブの接辞が存在しないことに符合する。マレー語の一部の方言には、アプリカティブの接辞もまた存在しないからである。現在の研究段

階では、どちらの仮説が正しいか判定することはできない。

## (2) アプリカティブ

アプリカティブに関しては、マレー語(インドネシア語)、スンダ語、ジャワ語、バリ語においては、マレー語における接尾辞-i と -kan の対応形が存在する。前者は主として「所格動詞」を形成し、後者は主として「受益動詞」と「道具動詞」の二種類を形成する。Shiohara (2012)では、標準インドネシア語のアプリカティブの機能について概観するとともに、意味的な観点から二つの接辞の歴史について説明を試みた。具体的には、接尾辞-i に関しては一つの意味的な機能を設定することによってその接辞が示す多様な機能を説明することが可能なのに対して、接尾辞-kan に関しては、それが持つ「受益」の意味と「道具」の意味を統一的に説明することが不可能であることを示した。このことは Kroeger (2007)が示している -kan は歴史的に二種類のソースから成るという仮説の傍証となると思われる。

一方、ササク語の一部の方言とスンバワ語においては、アプリカティブの接辞は存在しない。このことは、ササク語の一部の方言とスンバワ語は、マレー語の簡略化された形から発展したものであると考えることができるかもしれない。

## 参考文献

Kroeger, Paul. 2007. Morphosyntactic vs. morphosemantic functions of Indonesian -kan. In: Annie Zaenen, Jane Simpson, Tracy Holloway King, Jane Grimshaw, Joan Maling, and Chris Manning (eds.) Architectures, rules, and preferences: Variations on themes of Joan Bresnan, 229-251. Stanford, CA: CSLI Publications.

Ross, Malcolm. 2002a. The history and transitivity of western Austronesian voice and voice-marking. In: Fay Wouk and Malcolm Ross (eds), 17-62.

Wouk, Fay. 2002. Voice in the Languages of Nusa Tenggara Barat. In: Fay Wouk and Malcolm Ross (eds), 285-309.

Wouk, Fay, and Malcolm Ross. (eds) 2002. The history and typology of Western Austronesian Voice Systems. Canberra: The Australian National University.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Asako Shiohara, Clause combining in Sumbawa, Indonesia, Asian and African Languages and Linguistics, 査読あり, vol.8, 2014, pp.59-77.

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/75666>

Asako Shiohara, Tense, Aspect, Mood and Polarity in the Sumbawa Besar Dialect of Sumbawa, NUSA, 査読あり, vol.55, 2014, .173 -192.

<http://hdl.handle.net/10108/74332>

Asako Shiohara, Voice the Sumbawa Besar dialect of Sumbawa, NUSA, 査読あり, vol.54, 2013, 145-158.

<http://hdl.handle.net/10108/71809>

〔学会発表〕(計2件)

Asako Shiohara and Ketut Artawa, Grammaticalization of ajak 'invite, accompany' in Balinese, 12th International Conference on Austronesian Linguistics, Udayana University, Bali, Indonesia. 2-6 July, 2012

塩原朝子 「インドネシア周辺の言語における知覚、感覚、感情表現」 日本言語学会第144回大会 2012年6月17日 東京外国語大学.

〔図書〕(計2件)

Asako Shiohara, Information structure and information status in the Sumbawa language of Indonesia, Proceedings of the International workshop on Information Structure of Austronesian Languages. ILCAA, TUFs. 2014. 211-228.

<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/75992>

Asako Shiohara, Applicatives in Standard Indonesian, Wataru Nakamura and Ritsuko Kikusawa (eds.) Objectivization and subjectivization: A typology of voice systems. National Museum of Ethnology. 2012. 59-76.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

塩原 朝子 (SHIOHARA, Asako)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化  
研究所・准教授  
研究者番号：30313274